もしも糸と自分だけになったら

「どんな世界になっても、編むという能力を使って生き延びる」。
そのために修行や研究をしている、というのが、最近の作品制作の感覚です。

地震多発国で暮らし、コロナ禍の経験やウクライナ侵攻のニュースから、編むことは物理的にも精神的にも生きるための技術ということを改めて感じています。また、大量の糸を使用し所有してきたことから残糸問題が身近になり、糸は有り余るほどあるという発見もありました。このようなことから、冒頭の宣言には確信のようなものをもっています。

私は1次元の糸を原子、それを絡ませながら3次元の物体にする編み物を結晶を形成することだと考え、編み物による作品を、地球の成り立ちに準えます。宇宙に漂う鉱物が集まって誕生し、循環し変動しながら生きている地球のように、糸を編み、一時的に作品となり、ほどき、マグマのようになった糸がまた他の作品へと循環するのです。

そこがどんな環境であろうと、地球に眠る大量の残糸を新しい資源として、編んでは生き、ほどいてはまた次の場所で新しく編んで生きる、という世界観がいつも頭の中にあります。

2024年4月18日　力石咲